

# 鎌田道隆著 『近世京都の都市と民衆』

坂 本 博 司

本書は、京都市史(『京都の歴史』)の編さんに長く関わってこられた鎌田道隆氏の論文集である。まず、初出一覧によって本書の構成を確認しておこう。

の世相を素材として―

〔奈良史学』第二号、一九八四)

## 第一篇 近世統一権力と民衆

## 第二篇 近世都市と市民生活

第一章 戦国期における市民的自治について―上下京・町

第一章 町の成立と町規則

〔京都町触の研究』、岩波書店、一九九六)

組・町をめぐって―

第二章 京都における十人組・五人組の再検討

〔奈良大学紀要』第十二号、一九八三)

〔京都市歴史資料館紀要』第三号、一九八六)

第二章 京都改造 ―近世石高制の都市へ―

第三章 都市借家人問題の歴史的展開

〔奈良史学』第十一号、一九九三)

(新稿・一九九九)

第三章 初期幕政における京都と江戸

第四章 近世都市における都市開発―宝永五年京都大火後の新地形成をめぐって―

〔奈良史学』第十号、一九九二)

〔奈良史学』第十四号、一九九六)

第四章 慶長・元和期における政治と民衆 ―「かぶき」

## 第五章 近世京都の観光都市化論

〔奈良史学〕第十六号、一九九八

付論 民衆運動としての天保踊

〔藝能史研究〕第五十四号、一九七六

## 第三篇 政治・都市・市民

第一章 「おかげまいり・ええじゃないか」考

〔藝能史研究〕第四十三号、一九七三

第二章 幕末における国民意識と民衆

〔奈良大学紀要〕第十六号、一九八七

第三章 幕末京都の政治都市化

〔京都市歴史資料館紀要〕第十号、一九九二

第四章 京都と「御一新」

〔文明開化の研究〕、岩波書店、一九七九

柱となる論考は、鎌田氏が京都市史編さん所から奈良大

学に移られてから著されたものである。とりわけ意欲的な取組が、第一篇「近世統一権力と民衆」に集められた。いずれも、これまでの研究や通説に真正面から疑問を投げかけ、自問自答の末に形づくられていった成果である。大量

の新出史料を自由に操る仕事とは違って、必然的に先学の批判、問題点の指摘からはじまり、新しい論への組み替えと再構築の作業がなされていく。どちらかというとな嫌な役回りだが、おそらく、これらの基本となる骨格は、ずいぶんと以前から暖められていたものと思われる。

第一章「戦国期における市民的自治について―上下京・町組・町をめぐって―」は、「町―町組―上下京と京都の町自治が発展する」、あるいは「戦国期に町自治が挫折・変質させられた」という旧来からの考え方に対して、抱き続けてきた違和感を自ら払拭することを目的にしたものである。結論としては、町は織田政権の登場以降、地子銭免除によって土地所有を基盤とする政治的行政的な単位として育成されるとする。通説をきゅっとひねったような見方に戸惑いを覚えるかもしれないが、これまでの認識の甘さに対する的確な指摘であるとともに、近世町共同体の輪郭を明確にした論考である。

第二章「京都改造―近世石高制の都市へ―」は、豊臣政権の時代を前後期に区切り、京都が巨大な市場機能をもつ経済都市、「近世都市」として改造される課程を検証する。天正十八年以降を「後期豊臣政権」と位置づけ、「短冊型

町割」「寺院街の形成」「公家町と武家町」「お土居の建設」

「地子銭の免除」と街区全般に目を行き渡らせる。

第三章「初期幕政における京都と江戸」は、二元政治つまり江戸と駿府の二元政権論の見直しを説き、西日本支配の相対的な独自性を示しながら、これを東日本・西日本の二元構造への政治的対応との見方を示す。初期幕政の中核にあった京都から、地域史的な視点でもって二元政治論を見据えた説得力のある見解である。ちなみに、鎌田氏には先行の著作、『近世都市京都』（角川書店）と、叙述の趣きは異なるが『京・花の田舎』（柳原書店）がある。第一篇の二章・三章は、前者の第一章と第二章をそれぞれ補完・強化するものであることを付け加えておく。

第四章として組み込まれた「慶長・元和期における政治と民衆」は、一転して華やかなテーマ「かぶき者」が取り上げられる。芸能や風俗といった観点から語られることの多い対象に、時代と社会的な背景からアプローチを試みたもので、貫徹される新しい政治秩序への抵抗の姿をそこに読みとろうとする。たしかに、近世初期の風俗画に彼らの姿は、町の生活を営む民衆とともに見事にその構図に溶け込んで描かれる。洛中洛外図のいくつものカットが思い浮

かぶ。

第二篇は、新稿一つを含む比較的最近の論考を中心に五章から構成される。町共同体の自律的な活動の実態と推移、都市民の動向に関心が寄せられる。まず第一章「町の成立と町規則」は、前後の論考を軸として、近世京都の町それ自体に焦点を絞り込んだ、いわばまとめ的な作品とできる。町と構成員による共同かつ私的な家屋敷の所有関係を基礎に、町内の意識の高まりと、町が行政上の単位として質的に揃えられてくる過程を町規則を中心に追う。

第二章「京都における十人組・五人組の再検討」は、これも第一篇の流れにあるもので従来の理解やその混乱を正すことを目的としている。町内の役職については、自治の性格と内容に大きく関係する問題であるから、念入りの実証のスタイルをとり、隣保組織あるいは互助組織としての家の組と、町役としての五人組を峻別することに成功している。当該時期の京都の町文書はきわめて限られ、それについて性格は一樣でない。扱いの難しい少ない情報に、適切に処理されている。

第三章「都市借屋人問題の歴史的展開」は新稿である。ここで著者は町共同体のなかに足を踏み入れる。といって

も正規の構成員である家持ではなく、それを補充する借屋人としてである。借屋がどのように理解されていたのか、近世初期から後半にかけて、規制と実態について、町触と多様な町自身の規定を絡み合わせながら、その変遷を整理している。借屋人の問題は、都市史を語る上で重要な関心の一つである。本稿は京都でもって、それを取り上げる場合の下敷となるだろう。

さて、都市を襲う災害で、もっとも大きなダメージを与えるものに火事がある。京都でその最たるものが、天明の大火である。これによっておそらく大方の町が、文書を焼失させたのではなからうか。なんとか被害を免れた明和四年の沽券帳が、町の貴重な土地台帳として長く持ちつがれていることがあるが、天明年間以前は本当に少ない。町文書の調査を経験した者の実感である。第四章「近世都市における都市開発」は、それに先行する大火の一つ、宝永五年に起きた火災後の、禁裏周辺の町々や寺院の集団移転を取り上げている。二条川東など郊外への強制移住は、生活面での条件に恵まれず、しだいに移住先が遊所化した状況を指摘する。災害からの復興とその後の町づくりの困難さをあらためて知るおもしろいとする。

第五章「近世京都の観光都市化論」は、近世中頃の京都市中全般のとくに文化的動きに注目する。数々の京都ブランド、多分野におよぶ京風文化を紹介しながら、京都の経済都市から観光都市への転換を概説的に述べる。四章、五章、個別テーマと概論という別はあるが、近世中期の京都に目を向ける。ここで鎌田氏は、京都は膨張せずに、いい意味で停滞しながら、自らの努力によって、個性あふれる文化を生み出してきたとする。『京・花の田舎』においても、京都庶民の地道な営みを積極的に評価しようとする態度が貫かれている。

筆者が勤務する宇治の場合も、人口などの町勢を不すデータは近世を通じて、あきらかに衰退の一途をたどる。初夏の製茶の最盛期には、外部から茶摘みや焙炉師など、大量の季節労働者の受入を不可欠とし、茶業は近隣の村々を巻き込み、どんどん成長を遂げている。また程度の差はあるが、宇治も観光地である。外来者を呼び込む、興味を喚起するものがあって、それが最大限に活用されたのである。内面的あるいは内在する要因とともに、外界からの要請、京都やその周辺を含めて抱きつづけられる憧れやまなざし、それに関連して実際に投入された資本や労働力にも関心を

よせたいと思う。このあたりの相関関係、人びとのエネルギーの源を明らかにする具体的な検証が、いろんな方面で積み重ねられていく必要があるのだろう。

幕末から明治維新期をあつかった第三篇「政治・都市・市民」は、著者のお得意とされるところで、町文書を慎重に切り刻むように配列するこれまでの各論の手法とは異なり、史料がゆったりと駆使されている。著者は対象によって緩急・硬軟のテクニクを見事に使い分ける。熱心に取り組まれている「おもちゃ」づくりや徒歩による伊勢参りの実践、「実験歴史学」もその範囲を出るものではない。

本篇では京都が歴史の表舞台に、あらためて登場する幕末、翻弄されながらもいきいきと躍動し、かつしっかりと将来を見つめようとする民衆の姿を抽出する。特徴的なのは、第二章「幕末における国民意識と民衆」である。ここでは京都の町中と、同時に広い海原を見渡すかのように、二つの舞台を交錯させながら、民衆的な視座と国民意識の関連を説きすすめる。熱く語られる国民的な海防の考え方は、著者が屋久島の生まれ育ちであることと無関係ではあるまい。南国の暖かい風と潮の香りが、近世都市論とからみあっている。

本書によって築かれた近世京都研究の新しい起点から、さらに高い関心が呼び起こされることを願うとともに、各論考で提起された課題に、鎌田氏はもちろん研究室全体で取り組まれることを期待したい。

(平成十二年三月刊、思文閣出版、三九五頁、七八〇〇円)

(宇治市歴史資料館)